

教会暦による説教  
ルカによる福音書 22 章 54 節-62 節  
『振り向いて見つめられた』

「まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。主は振り向いてペトロを見つめられた。」ペトロは自分が主イエスに見つめられていることに気づいた。見つめられている自分を感じていました。そのまなざしはどんなまなざしだったのか。

ペトロはキリストの弟子の中でも代表格の弟子でした。キリストの弟子は、ルカ福音書によれば、12人の他にも72人はいたことが記されていますが、おそらく100人ぐらいいたなのでしょう。その代表格であったのがペトロです。彼は弟子を代表して発言することもあり、大事な場面では彼は必ず立ち会っている。

そのペトロが主イエスから今日の聖書箇所少し前の31節のところで、こう言われる。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。」あなたがたはサタンの誘惑に出会う、と言うのです。それだけでない。「しかし、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。だからあなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言われるのです。つまり、キリストはこの時ペトロに対し、あなたはサタンの誘惑に出会って、信仰がなくなるような危機を迎える、と言っているのです。さらに言えば、サタンの誘惑の前で敗北するだろう、と言われた。立ち直ったら、ということは挫折する、ということですよ。誘惑にさらされて、負けて、倒れる。サタンの働きの中でひねりつぶされる、ということですよ。

しかしペトロはそのキリストの言葉の意味がまるで分からない。わからない、というよりも耳に入らない。自分のこととして聞いていない。だから、「主よ、ご一緒なら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております。」自分は大丈夫。大丈夫どころか、どこまでも主イエスについていきます、と覚悟の程を述べたのです。けれど、主イエスはそのペトロに対して、「ペトロ、言うておくが、あなたは今日鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」と言われる。あなたはわたしに従うどころではなく、わたしのことを知らない、と言って否認する、そう予告するのです。すさまじい言葉。ペトロの人間としての本性を

抉りだしていくような言葉。あなたはわたしを裏切っていく。誘惑の中で裏切っていく。そう言われたのです。

そしていくばくかの時間をおいて今日の聖書箇所です。主イエスは祭司長や長老たちによって逮捕されます。弟子たちの多くは逃げ出していく。しかしペトロは逃げ出しはしないものの、かといって、逮捕された主イエスにそばにつき従うわけでもなく、遠くから群衆に紛れ込んで主イエスを見つめていたのです。

主イエスは大祭司の屋敷の庭に連行されていきました。大きな庭だったのでしょう。ペトロも人々に紛れて庭に入り込み、息を殺すようにして、腰を下ろしました。庭の真ん中には、火がたかれています。闇の中、焚火の炎が人々の顔を照らし出す。一人の女中が炎に照らし出されたペトロをじろじろと見つめ、「こいつもあの人と一緒にいたよ」と声を出した。こいつはイエスの仲間だ、と叫んだのです。ペトロは即座に「その人のことなんか知らない。」と言った。少したってから他の人がペトロを見て、「おまえもあの連中の仲間だ。」と言った。ペトロは「いや、そうではない」と重ねて否定する。一時間ほどたってから、また別の人が「確かにこいつもあの男の仲間だ。こいつはガリラヤ人だから。」「あんたの言っていることなどわからない。」ペトロがまだ言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。

その時、主イエスは振り向いてペトロを見つめられた。広い庭、人々の中に紛れていたといえ、ペトロは主イエスに見つめられていた。「お前はあのイエスの仲間だ」と言われて、三度それを知らないと言って否定した。そのペトロを主イエスは振り向いて見つめられた。

ペトロは、「今日鶏が鳴く前にあなたは三度わたしを知らないというだろう」と言われた主の言葉を思い出し、外に出て、激しく泣いた、と聖書は記しています。

ペトロはなぜ激しく泣いたのか。

ほんの何時間か前、主イエスにあなたはサタンの誘惑の前で挫折する、と言われて、大丈夫です、どこまでも従っていきます、と言っていたペトロ。だが、いざ主イエスが逮捕され、自分の身に危険が及びそうになると三度もイエスのことなど知らないと言った、その自分のふがいなさを泣いたのか。ずっとついていきますと言っていた自分の先生をいとも簡単に裏切り、知らない、と言ったのけたその自分にあきれて泣いたのか。どこかの組織の親分子分でもこれほどあっけなく否認はしないだろうというほどに考えなしに否認した自分に泣いたのか。そもそもあまりに不信仰な自分に泣いたのか。

ペトロが激しく泣いたのは、自分の弱さ、自分のふがいなさ、自分の情けなさ、自分の不信仰にやりきれなかったからかもしれない。しかもそれは、主イエスに見つめられて、主が自分に語った言葉、自分が主に語った言葉を思い起こし、自分の情けなさ惨めさに泣いた、ということなのではないか。

つまりペトロは、自分のことを思って泣いたのです。自分のための涙。

しかしこの情けない、みっともないペトロの姿を本性をキリストは熟知しておられた。ご存知だった。自分は大丈夫、どこまでもついていきます、というペトロの言葉は、自分の信念により頼んで生きようとする人間の姿そのもので、まさに不信仰そのものの姿でした。自分は大丈夫、と思込む強さはどうしようもできない弱さそのものです。ペトロは弟子の代表格だったにもかかわらず、このありさまは情けない、という人がいます。しかし、情けなかりうがみっともなかりうが、それがペトロの姿、人格、本性（ほんしょう）であり、キリストはその姿を見ておられたのです。そしてペトロが挫折し、自分の弱さに打ちめされるその時のために祈っている、と言われたのです。

ペトロは自分の情けなさには泣いていたかもしれないけれど、自分のために祈り続けてくれているキリストにまだ出会っていない。自分が弱い、ということにうずくまっている。自分が情けない、ということの中に涙流している。だがその自分のために祈り、その自分のために十字架にかかろうとしてくださっている方がおられる、ということに目を向けていない。

ペトロのまなざしはこのときどこを向いていたかと言えば、自分自身なのです。ペトロにはもっとも大事なことがまだ見えていなかった。それはキリストの存在そのものです。自分のために祈り続け、この自分を愛して下さって、この自分のために、十字架にかかるキリストの存在です。存在そのものです。

逮捕されようが、鞭打たれようが、嘲られようが、ペトロのためにも十字架にかかることに向かうことをやめないキリストの存在。その存在が自分にはある、ということに気づいた時、彼は激しく泣くのではなく、もっと別な応答を生み出していくのだと思います。

ペトロは振り返って自分を見つめたキリストのまなざしをいつまでも覚えていた、と思います。激しく泣いている今このとき、何もわからなくても、後になってペトロはこのときの自分を見つめている主イエス・キリストのまなざしを何度でも思い出したのではないか。思い出す、というよりもそのまなざしが自分を射抜くような経験をしたのではないか。

キリスト教信仰というものは、キリストのまなざしによって自分が射抜かれ

ていることの経験だろうと思います。わたしというわたしもよくわかっていない存在をキリストは熟知していただき、そのわたしを愛し、十字架にかかっていかれるそのまなざしと出会う経験。

大事なことはペトロがどれだけ自分の不信仰を悔いたか、というようなことではない。キリストを裏切ったことをどれほど悔いたか、ということでもない。大事なことは、自分が不信仰であろうが裏切るものであろうが、どんなものであろうがその自分のために祈り、十字架にかかり、甦ってくださったキリストがいてくださるということ、その存在に出会うことなのです。

キリストという存在に出会う。ペトロは確かに毎日キリストと行動を共にし、寝食を共にしていた。しかしそれがすなわち存在と出会うということではなかった。ペトロがキリストという存在に出会ったのは、ある時、ある瞬間、振り向いて自分を見つめられたキリストのまなざしを思い起こしたその時だったのではないか、と思います。

わたしたちはペトロと違って、直接的にキリストに出会ったことはない。肉眼でキリストを見たことはない。しかし福音書を読むということは、聖書を読むということはペトロが経験したキリストのまなざしとの出会いを、わたしも経験することへと向かっていくのです。聖書はわたしたちがキリストという存在に出会うことへと促す。わたしを見つめてくださっているキリストにわたしが出会う。

その時、キリストの言葉の一つ一つがわたしの中で生き活かされていく。

祈っているというキリストの言葉も、立ち直ったらほかの人たちを力づけてやりなさい、という言葉も、切り取られた励ましや教訓のような言葉ではなく、裏切るペトロをなお見つめるキリストのまなざしの中で語られた言葉です。

わたしを見つめるキリストのまなざしと出会い、キリストの存在そのものと出会い、その中で御言葉に聞いていきたいと心から願うものです。